学生による学部教育活性化のための活動（その3）
ゼミ紹介・ゼミツアー†

渡邊　大介*・吉永　一行**
京都産業大学　法学部 4 年次*
京都産業大学　法学部**

キーワード：学生グループ、ゼミ紹介、ゼミ相互の交流

1. はじめに

「学生による学部教育活性化のための活動」と題した3本のレポート（第1レポートは本誌75頁、第2レポートは本誌79頁を参照）の第3レポートは、第2レポートに続いてゼミ活動の活性化に関する取り組みを紹介する。第2レポートでは、ゼミ相互の交流を目指したイベントを取り上げたが、この第3レポートでは、ゼミに所属する学生が、これからゼミに応募しようとする後輩となる学生をサポートしようという取り組みを紹介する。

この取り組みも、第2レポートで紹介した政策立案コンテスト同様、ゼミネット連絡会が行っているものである。ゼミネット連絡会について詳細は、第2レポートを参照されたい。

次節からは、2010年度にゼミネット連絡会の代表を務めた渡邊が、ゼミネット連絡会によるゼミ紹介及びゼミツアーの取り組みを紹介する。

2. ゼミネット連絡会によるゼミ紹介関連の取り組み

2.1. 序

ゼミ紹介に関連したゼミネット連絡会の活動は、5 月に各ゼミがゼミを紹介する A4 判のミニポスターを作製し、法学部棟（4 号館）に掲示することから始まる。ゼミネット連絡会は、法学部履修相談室内に専用のポストを持っており、そこに投函してもらう（ミニポスターには個人情報などが書かれていることもあるので、鍵付きのポストを事務室から頂いている）。ゼミネット連絡会の代表は記載内容をチェックし、事務室に届け、掲示許可の印をもらってゼミネット連絡会専用の掲示板に掲示する。

11 月には翌年度ゼミの募集に向けたゼミ説明会を行う。これは 2 年次演習・3 年次演習がどのようなものかを、各ゼミの代表者に登壇してもらい説明してもらうというものである。2010 年度は 515 教室を用い、11 月 10 日(水)13 時 15 分から 16 時まで開催した。また、2010 年度はこれに付随して 11 月 11 日（木）から 17 日（水）にゼミツアーというイベントを行った。

2.2. ゼミ説明会

2.2.1. 概要

ゼミ説明会とはゼミ紹介とも呼ばれ、毎年 11 月のゼミ募集に先立って行われるイベントである。法学部の各ゼミに所属する学生が、これからゼミを受講しようとする学生に向けて、自分のゼミの説明を行なうものである。

2.2.2. 従来の説明会の問題

(1)　告知方法の問題

イベントなどについては Web 掲示板である POST から連絡が来るが、私の私見として、多くの学生がこれを見ていないというのが現状だと思っている。その中には、ゼミの募集要項など見逃してはならないものもある。

写真1.　2010 年度ゼミ説明会の風景

中には「POST で流しているのだから後は自己責任」という考えもあるかもしれない。しかし学生に対して、日常的に大して関係のない情報が流れていることが多い（見逃しても日常生活に関係しない）POST を毎日見るように強いるのは、土台不可能である。となれば、どうしても届けなければならない情報は、こちらが直に伝えるしかないと考えた。

(2)　伝えるべき情報が不明確

学生が知りたい情報がゼミ紹介の中に含まれない可能性があるというのも、問題だと思っていた。ゼミは学生のものだけではない。先生方にも求める人物像があるはずだ。また、勉強内容や分野だけでなく、どのような学生がいるのか、つまりゼミの雰囲気を含め興味を持ってもらいたいのである。ゼミ紹介というイベントが作られた経緯も、そのようなゼミの雰囲気を少しでも学生に知ってもらおうとしたからではないだろうか。

2.2.3. 2010 年度にとった工夫

(1)　告知方法について

私は1年生に対しては、必修科目の刑法Ⅰの授業時間中にゼミ説明会の日程を告知させてもらうことを考えた。刑法Ⅰは 4 単位で週 2 回の授業、それを 2 クラスで開講していた。私は刑法Ⅰを受け持っておられる 2 人の先生に、授業の最初か最後で告知させてもらえるようにお願いした。両先生に許可を頂き、それぞれゼミ紹介の日程を告知させていただいた。

必修科目というだけあって出席人数は多く、効果は絶大だったのではないかと思う。問題となったのは 2 年生への宣伝だった。1 年生と違い 2 年生には必修科目というものがなかったので、告知するのかしないのか、またするとしたらどの授業かということが問題となった。

結局、2 年生に対しては、私の経験上履修者が多いと考えた会社法Ⅱにおいて告知させて頂いた（私は別の授業を受講していたので、他のゼミ長が代行してくれた）。そもそも 2 年生のゼミに対する関心は 1 年生よりも強いと考えていたし、後は POST と学生の友人間のコミュニケーションに任せることにした。

法学部のゼミは 2 年次から入ることができるにも関わらず、実際には応募者が少ないという現状があった。私としてはやる気がある学生には 2 年生の時からゼミに入り専門的な勉強を進めて欲しかった。しかし勉強する意欲のある学生はサークルなどに入らない人も多いので、学生間のコミュニケーションが希薄な傾向にあるように思う。そのような学生に対しては情報提供が出来たのではないかと思う。

(2)　当日配布の資料について

当日配布する資料にも工夫を加えた。ゼミの雰囲気については当日発表してくれる各ゼミ生を見てもらえれば良いとしても、そこにゼミを受け持つ先生方の意志が一切入らないのも問題だと感じていたのである。

次年度のゼミを受け持つ先生方には、もちろん求める人物像があるはずだ。しかし、学生の発表が専らゼミのイベントや飲み会についての報告になることも予想できた。そこで、法学部事務室にお願いして、翌年度のゼミについてのシラバスのデータを頂き、それを印刷して、配布資料に折り込むこととした。

また配布資料の中には学生にも A4 のフリースペースを与え、シラバスと合わせて見開きで各ゼミに A3 サイズのスペースを与えた。しかし、大学生にとって A3 サイズは使いづらい。多くの学生は B5 サイズのルーズリーフを普段のノートとして使用しており、A 判サイズで配布物があると別のファイルが必要となるのである。そこで、ルーズリーフをまとめているファイルに挟んで携帯してもらえるように、印刷に際しては、A3 サイズで作成したものを B4サイズに縮小した。

これらの配布資料はゼミ紹介当日までに 250 部作製した。作製にあたり、用紙代を法学会に補助して頂いた。配布資料は表紙、後述するゼミツアーの日程一覧、そして各ゼミのシラバスとフリースペース(提出がなければシラバスのみ)からなり、それを両面刷りで作成した。資料は 15 枚（30 頁）となり、それを印刷するのは時間と手間の面で苦労した。

2.2.4. 運営をめぐる問題と対応

(1)　参加申込みの方法と実際の出欠

学生が教員の預かり知らない場所で勝手な発表をしないように、ゼミ説明会の参加表明書には、担当教員のサインを求めることとした。参加表明書はゼミネット連絡会の会合でゼミ長に配布したのだが、教授会でもゼミツアー開催の件について書面で配布していただいた。これで教員から学生に、「ゼミ紹介どうなってる？」と自然と話が行くような仕組みを作った。

サインを求めたことにより、書類提出が遅れることが予想された。また、後で知ったのだが、学生はゼミ紹介をするつもりがなかったが教員は是非して欲しいと思っていたゼミがあったようで、ゼミ紹介前日に先生に言われたので参加したいというゼミもあった。それは予想していたし、逆に参加表明したにも関わらず、当日会場に現れなかったゼミもあった。聞くところによると、当日の就職活動イベントに参加しており、誰も手が空いていなかったとのことだっ

た。

(2)　タイムスケジュールをめぐる問題と対応

当日はタイムテーブルを厳密に予測することができないと思っていた。理由として、飛び込みでゼミ紹介したいと申し出るゼミと直前で参加を取りやめるゼミが出てくると予想していたことと、各ゼミの発表時間が予想できなかったことがある。翌年度から新たにゼミを持つ予定の 2 人の教員が、ご自身で説明すると仰ったことも、タイムテーブルの予測が出来ない理由の一つだった。

先生方はお忙しいので、会場に来たら 1 時間以上待つことになったなどということは避けなければならなかった。そのため学生に説明したうえで、先生方は来ていただいてすぐ発表が出来るように順番を割り込ませる形とした。また、発表者の話す時間も、2 分で終わるゼミもあれば 10 分話すゼミもあるだろうと思っていた。目安の時間は説明していたのだが、守られるはずがないと考えていたし、実際その予想は当たっていた。

当日の発表順は、集合時間前に集まっていたゼミはくじで、その後は随時受け付け順とした。仕方なく採用した方法であったので弊害も少なからずあった。まず、聞く側にとってはどのゼミがいつ出てくるか分からないということがあった。また 3 時限目から開催したので、その時間に授業がある発表者に対して配慮が出来なかった(運良く早い順番を引いてくれたので事なきを得たが)。

またとりわけ、説明会全体の時間が長くなってしまったことについては、発表者と聞く側の両方に対して申し訳なかった。当然時間が長くなれば聞く側の学生はだれるし、次の予定もあるので退出しなければならないこともある。発表者には時間がたつにつれて人数が少なくなり、最初の熱気と落差がある中で発表してもらうのは不公平な感覚もあった。

(3)　資料の部数の不足

ゼミ説明会には720 人を収容できる515 教室でも立ち見が出るほどの人数が集まり、250 部用意した資料は一瞬でなくなってしまったため、急遽増刷を行なった(ゼミ紹介が終わっても履修相談室に取り置き続けていたので最終印刷部数は 500 部程度)。この資料の改善案としては、POST で配布されるゼミ申請用紙を資料に最初から付けておくことなどが話し合われた。2009 年度よりも人数が多く集まった理由は、やはり広報への力の入れ方だろう。学生に積極的に情報提供していけば学生はリアクションを示してくれるということを実感した。

(4)　発表内容

当日私が一番気にしていたのは学生が笑いを取ろうとしてふざけないか、という点であった。ゼミ紹介をゼミの情報提供と捉えていたので適切な情報が発信されないと意味がない。よって学生が大勢の前でふざけた発表をしないか注意をしていた。そのためゼミ紹介についてゼミ長に配布した資料には「ふざけたら打ち切る」と明記した。実際、2009 年度のゼミ紹介は酷かった。少数のゼミだったが、学生の悪ノリの延長で身内だけで盛り上がっている印象だった。そんなことは今年はしてはいけないと考えていたのである。

しかしそれは杞憂だった。この年はそのようなゼミが出ることもなく、全てのゼミが自分達のゼミの専門分野に触れた発表をしていた。もちろん笑いを誘う部分もあったが、それは良識の範囲内だった。これについては留意しなければならない点だが、私の気にしすぎもあったと反省している。

2.3. ゼミツアー

2.3.1. 概要と狙い

2010 年度は、ゼミを選ぶうえでの参考としてもらうため、ゼミ説明会に加えて、ゼミツアーというゼミ見学会を行なった。ゼミツアーはゼミ見学の集中週としての意味合いが強い。もともと年中いつでも見学者歓迎としているゼミが多くあるからだ。しかし、ゼミ紹介のミニポスターに「○○教室でやってます！ぜひ見学に来てください！」と書いてあっても、これを見た学生が果たして行くだろうかと前から疑問であった。よって、ゼミ申請期間中をゼミツアー集中週とし、特にこの週は、見学を積極的に受け付けるというイベントを企画した。

ゼミツアーは、集合場所として履修相談室を使用し、授業時間までに集まった学生をゼミ長が迎えに来てゼミを見学するというものである。これについては、ゼミ説明会のときに一緒に参加表明書を配布していた。やはりこの企画も教員の承諾が必須である。学生が見に来てほしいと考えていても、教員がそれを望まなければ見学者を帰すことになりかねない。また、授業内容は各ゼミに一任した。普段通りの授業を行ったゼミのほかに、法科大学院の模擬法廷を使って授業を行ったゼミもあった。そのほうがそれぞれのゼミの特色が出ると考えていたし、無理に「いつも通りで」とこちらから要請するのも変な話だろうと考えていた。

学生のゼミ選択の現状は単位認定の難易度と担当教員の人柄や人気に左右されているのだと思う。そのような

学生に対して、ゼミの「内容」に興味を持ってもらうきっかけに、またすでに研究内容で選んでいる学生に対してはミスマッチを減らすという役割を期待してゼミツアーを企画した。さらには、法学部全体でゼミに所属する学生が増加することを期待した。

2.3.2. 結果と反省

ゼミツアーはこちらの呼びかけに応じてくれたゼミだけになったが、35 あるゼミのうち 22 のゼミが参加してくれた。参加した学生は、重複があるかと思うが 160 人に達し、初年度にしてはある程度の成功を収めているのではないかと思う。

初めての企画のわりに人数が集まったのは、ゼミ説明会の告知と同時にゼミツアーについても告知していたからだ。またゼミ説明会の時に複数のゼミが、ゼミツアーを○曜日開催しますと告知してくれたことも一因だろう。配布資料にもゼミツアーの時限と曜日の一覧を入れたし、ゼミネット連絡会の掲示板にも同じものを掲示した。この時期は多くの学生が掲示板を見るので効果はそれなりにあったと思う。

しかし問題点も指摘された。まずゼミ長との連携がうまく取れていないゼミが多くあった。当日ゼミ長が休んでおり、履修相談室に迎えに来ないという問題が起こった。これは集合場所を提供してくださっている履修相談室に多大なご迷惑をかけた。学生履修アドバイザーの方が教室に送ってくださったということもあった。それに付随して、履修相談室に集まった学生の整理も学生履修アドバイザーの負担になってしまった。廊下がうるさくなる可能性を考慮しても直接教室に行かせる方が良いのか、このままが良いのかは検討課題である。

また、160 人という人数の 6 割を参加者上位 5 ゼミが集めているというのも一つの課題として上げることができる。複数のゼミと比較して、初めてこのゼミはこういう形式なんだな、と理解することができる。よって、学生が複数のゼミを回る施策を打ち出す必要があるだろう。

3. ゼミ紹介に学生が取り組む際の留意点と意義

3.1. 留意したこと

私がこの経験を元に得たものは、多くの人の意見をまとめ、それをいかにうまく回していくかということである。特に、ゼミ説明会におけるタイムスケジュールの管理ができなかったことが反省としてあげられる。それぞれ要望があって、それに合わせた形で対応したいが、それをすると別の方から苦情が出る、ということになる。それを収めるには一方に我慢してもらうしかないし、そのためには一定の基準やラインを引かざるを得なかった。

学生をうまく取り込むには、何重にも告知や掲示をする必要がある。伝えるために POST で流すだけでは駄目で、実際にビラを配布したり、教員の協力を求めたり、できることは多いはずだ。とにかく多くの学生の目にとまることを意識するのが良いと思われる。また、学生にヒアリングを行い、より理想的な方法を模索することが求められるのではないか。私が曲がりなりにも企画を成功させたのは、私自身が学生であるため、学生の気持ちや現状を少なくとも分かっており、それに即した行動ができたこと、また事務室や先生方と普段から付き合いがあり、うまく話し合えたからだと思う。

3.2. ゼミネット連絡会の存在意義

ゼミネット連絡会の究極の目的は、たとえ学生が本当に欲している情報が単位認定の基準のみだったとしても、ゼミにはそれ以外にも勉強内容や仲間づくりといった価値があることを見出させることにあると考えている。この点では、第 1 レポートで取り上げた履修相談室に通じるところがある。ゼミを選ぶためには、こちらがゼミの情報を提供することが大前提なので、学生を集めるために学生の興味を惹かなくてはいけない。

しかし、そのために学生の表面的なニーズを鵜呑みにした迎合は必要ない。私は必ずしも学生はゼミや勉強に無関心ではないと考えている。きちんと情報提供のための情報提供をしていけば、多くの学生は応えてくれると確信している。大学から情報をもらい、それを学生に伝えるという点でもゼミネット連絡会が果たす意義は大きいのではないかと思う。また、学生が主体の団体なので、学部が動くよりも学生のニーズを取り込みやすいのもメリットだと考えている。

3.3. ミスマッチ回避の重要性とそのためのゼミ紹介の役割

学生が欲しいと思う情報は、必ずしも提示されているわけではない。例えば、「ゼミの面接がある」という情報があっても、「どこを見るか」という情報は提示されないことが多い。そこでゼミネット連絡会はゼミ説明会で現ゼミ生を見てもらうことにしているのだと思う。どのような学生が欲しいかというのは、現ゼミ生をみることが一番の近道だと思う。そしてゼミ生の雰囲気を知れば、自ずと自分がここでやっていくことができるかということは分かるはずだ。そのためにも、シラバスだけでは分からないゼミの雰囲気を知っておく必要がある。

ゼミとのミスマッチが起こると学生はゼミに参加しなくなるというのを、私は今まで何人も見てきた。それは学生が「何となく」選んだからであって、さらに言うと単位目当てで受講したからだと思う。特に法学部はゼミが必修ではないので、受講しないという選択肢もあるはずだ。それでもゼミに入ろうとするならば自分が本当にこのゼミに合っているか、自分で判断することが要求される。そのための判断材料として、ゼミ紹介は存在するのだろう。

KEYWORDS: Student Group, Introduction of Seminars, Networking of Seminars

2012 年 2 月 17 日受理

† Daisuke WATANABE*, Kazuyuki YOSHINAGA**: Re-energizing Undergraduate Education by Students (3): Orientation Meeting of Seminars and Seminar Observations

* Faculty of Law, Kyoto Sangyo University Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan

** Faculty of Law, Kyoto Sangyo University Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan